

## 正倉院東西宝庫建設を回顧する

和田 軍 一

私が始めて正倉院の仕事に携ったのは、今からほとんど半世紀にも及ぶうとする、昭和六年の秋のことである。その年の十月、私は正倉院掛が置かれていた奈良帝室博物館（現奈良国立博物館）へ転任し、博物館の運営に当たるとともに、正倉院の管理、保存の任を担うこととなった。

一八七五（明治八）年「正倉院宝庫」は内務省の管轄となり（勅封は宮内省主管）、後農商務省主管時代を経て、一八八四（明治一七）年宮内省に所屬し、やがて主管部局は図書寮となったが、一八八九（明治二二）年宮内省被管の帝国博物館総長の管理として、奈良帝室博物館に属し、翌年宮内省中宝器主管が置かれ、二年後<sup>（一）</sup>明治二五年同省に杉孫七郎を長とする御物整理掛が設けられて、正倉院宝物の調査修理摸造に専念するところがあったが、日露戦役中之を廢した。同役後一九〇八（明治四一）年宝庫掛を置く帝室博物館をして宝庫を主管せしめ、一九一四（大正三）年遂

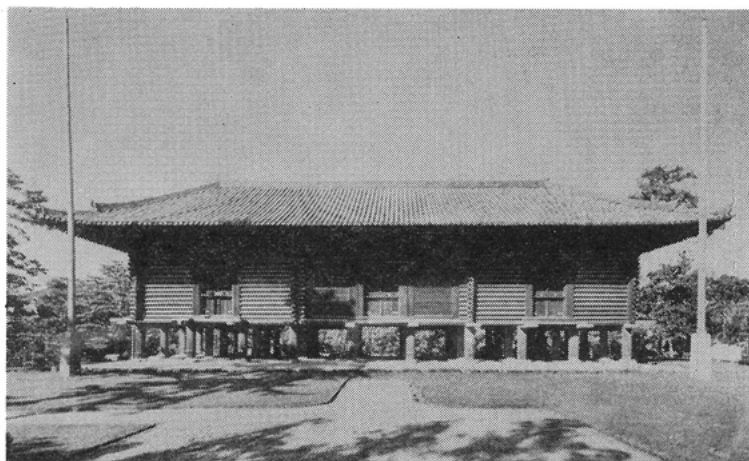
に奈良帝室博物館に正倉院掛が置かれたのである。

（一） 同館開館は之より六年後

奈良帝室博物館に赴任するに当って、私は時の内大臣牧野伸顯伯爵に喚ばれ、正倉院宝庫の安全上、宝庫東北の知足院谷方面の山林火災の事を心に留めるよう注意を受けたが、当時このような具体的意見を以って注意を促した人は同伯だけであった。そこは宝庫に最も近い人家に連なる地域であって、後日私は現地の状況に徴し、その人家等の火難に使用可能の貯水槽を設けて同伯の委託に応えた心算である。

今一人、奈良赴任当時、私に注文を出したのは時の帝室博物館総長大島義脩氏<sup>（二）</sup>であった。同氏が私に託した一事は、正倉院宝庫に代わる不燃性庫蔵建設を研究する事であった。

（二） 当時帝室博物館は東京、京都、奈良の三館があり、東京は単に帝室博物



最近の正倉

館と称し、他は夫々地名を冠して呼び、京都、奈良の長は館長、東京の長の総長が三館を総括した。

(3) 大島義脩氏は第八高等学校長、学習院長を経て帝室博物館総長となり、正倉院には特別な愛着を持ったが、所謂ホラ信事件の責を引いて挂冠した。ホラ信事件というのは、昭和七年四月帝室博物館陳列中の法隆寺献納御物四十八鉢佛中三鉢が盗まれた事件で、犯人ホラ信は参観者を装って入館、物蔭に潜んで閉館を待ち、夜に入って陳列ケースのガラスを破り、金色に輝く仏像を奪って、窓から逃げ、知合の歯科医に頼んで金質を調べて貰ったが、仏像が皆鍍金なることを知り、ある物は穢所に、ある物はどぶに捨てた。五月に入って盗難仏は悉く発見され、犯人も捕えられた。その間奈良では神戸港や骨董店に網を張ったり、有志が靈験の名が高い二月堂の本尊に発見祈願をした。

これより先、昭和四年四月宮内省は臨時正倉院宝庫調査委員会を設置

して、従来の宝庫および之に収蔵されて来た「御物」<sup>(4)</sup>の保全方法が研究論議された。論議はおうざっぱに言えば、「御物」を収納したまま宝庫の保全を図ろうとするもの(仮にA説とする)と、「御物」と宝庫を分離して保全を図ろうとするもの(仮にB説とする)とに岐れた。

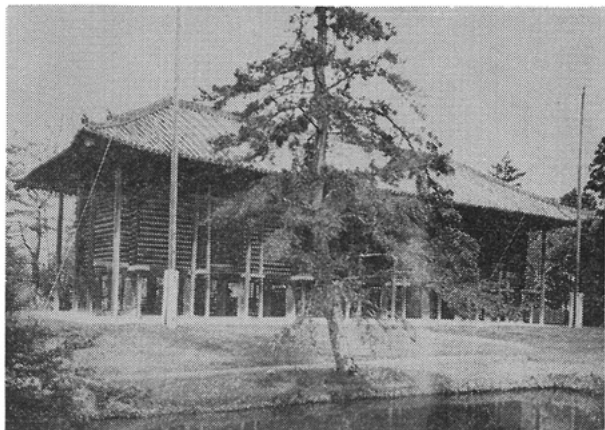
(4) 終戦後正倉院御物は従来慣用された「御物」という名を避けて、「宝物」の文字が用いられる。この小文においても特例を除いて、之に倣った。

正倉院における災、害の要因には雷火・近火等の火災、地震、風水、湿気、硫化等を伴う大気汚染、カビを主とする微生物等があるが、何といても最大の要因は火であり、火難の中でも雷火が恐怖の的である。しかも現実はその危険に正倉院は直面した史実がある。即ち一二五四年六月十七日夕、宝庫北倉の扉に落雷し、火を發し、火は遂に庫内に入り、階下南寄りの天井を舐めるに至った。時刻は戌刻というから、日が暮れて残照の頃、いわば夏の宵の口で、人々が集り易い時間であり、発火の場所も階下の低い所であったから、火を辛うじて消止め、災いを最小限度に止め得たのである。この身振いするほどの恐怖の痕は、現に北倉階下入口を入った南側の壁と、それに連なる天井に黒々と遺っていて、墨は触る指に附く。当時の状況を東大寺統要録は次のように記録している。建長六年六月十七日。天陰り雨降る。戌刻雷神勅封蔵に落ち懸かり、東面北端の扉を蹴破り、ならびに下柱をかき裂ぎ、知足院門辺に投げ捨て。即ち龍神蔵の内に入り、雷火宝蔵に付く。然る間、その火を消さんがために、扉を切り放ち、すなわち打ち消し畢んぬ。一寺騒動し万人群

集す。(今、書き下しに改めた)

(5) 高床を支える束柱のことで、東北の束柱数本はこの時に取替えた分である。なお扉も勿論取替えられた。

奈良平野は雷の多いところ、正倉院附近は雷の筋に当たっているが、この事を建長の実例と共に知っての事かどうかは別として、正倉院では夙く一八七八(明治十一年)「避雷線」二本を宝庫の前後に立てている。前記委員会では建久落雷の事は指摘されなかったらしいが、それはともかく、防雷が強く意識されたことは当然であって、宝庫を金網で覆う案が出たり、さらに進んで宝庫に不燃性の建物を被せる案が考えられた模様である。しかしながら主としてA説に基盤を置く金網論も翰堂論も施工中の、また施工後の危険を伴うもの——宝庫と宝物を却って損傷する惧あるものとして斥けられたらしく、委員会の空気は自然にB説、建築家佐野利器氏らの説へ傾斜した。これに



大正2年解体修理前の正倉

対し、正倉院宝物は勅封の權威の下に、宝庫と一体として保持されて来たところに意義と価値があるのであって、宝物と宝庫とを分離しては意味が喪失するとの論が黒板勝美博士と奈良帝室博物館長久保田鼎氏から打ち出された。かくして、宮内大臣に対する委員会の答申は科学主義に立脚するB説——宝物は耐震耐火の建造物に収納する案を以ってし、歴史尊重の、いわば歴史主義に立つA説を少数意見として併記することに落付いたのである。そして昭和五年十二月委員会は任務了えて廃止された。私が奈良博へ赴任したのは、その十ヶ月後で、古来の宝庫に代わる不燃性建造物建築に関する研究を私に慫慂した大島総長の意図は上記答申の実行にあったのである。

さて耐震耐火の建造物といえば、通例鉄筋か鉄骨鉄筋コンクリート造りであるが、当時私はコンクリート造りの収蔵庫は、そのままでは多湿高温の我国に適しないかも知れないと考えていた。ここに挙げる諸例はコンクリート造りだけでなく、また収蔵庫以外の建築物を含むのであるが、大理石で飾られた旧赤坂離宮、東京の某々二大建築、漆喰鍍磨の某神社宝物館、某寺院陳列館は夏期に壁、柱、床に湿気が露結し、甚しいのは水溜が出来たという現実には戸惑って、正倉院庫蔵の不燃性化は急がないことにした。しかし機会ある毎に収蔵庫や陳列館を見て廻った。灘の白鶴美術館陳列室の壁は、私の記憶が間違っていないければ、紙を張っただけで露結を見ないことも学んだ。

(6) 黒板博士の片腕でもあった建築家大江新太郎著「宝物の保存と蔵の知

識」に拠る。なお某神社宝物館は著者の設計監督に成り、開館に際して壁面等の露結に愕然とした失敗が、宝物館設計で黒板博士の絶大な信頼を得るほどの、その道の大家を育てた。

とこうするうちに、醍醐寺靈宝館が出来た。同館は陳列室と収蔵庫と長期滞在も可能な研究室を持ち、黒板博士と大江新太郎の合作に成るものであった。黒板博士は、若き日の欧米留学に際し、専門の古文書および古文書館の研究に関しては云うまでもなく、史跡、遺物とその保存方法の調査に力を致し、美術館、博物館、歴史博物館他一般的に云って博物館類における保存施設並びに利用方法等について調査せられ、その知識を以って、欧米諸国に遅れている我国における古文化財の保存・活用施設の開発に寄与せんとした。そしてこの智識と熱意を傾けて醍醐寺靈宝館建設に当られた。また大江技師は某神社宝物館での先年の悔いを雪ぐために究めた技術・智識をこの靈宝館の建造に注いだ。特にその高床式収蔵庫は、二字とし、一字の床は通例の平坦な床であるが、他の一字は床の中央に孔を開き、晴雨によって外気の流通を図り、また之を遮断する方法を採り、両倉の保存機能を比較する、いわば研究的意図を持った、黒板先生の新工夫の存するところであった。またその収蔵庫の壁はコンクリートの外壁の内側に空間を設けて桐材の板張りをしつらえたもので大江技師の苦心の存するところであった。

之を見学して私はコンクリート造収蔵庫の試作を考慮する方向に進み、実験に移ることとした。折から奈良博物館には収蔵庫建設の必要があった。もともと同館には旧事務所裏に古風な土蔵二つが併存し、列品・図

書等を収納するともに今一箇所、陳列館の一隅に列品収蔵の場所があった。敢えて「収蔵の場所」と表現するのであるが、そこは陳列館の一部を庫蔵に仮用した場所、三階になっていて、狭い階段を昇降するもので、小さい列品は抱きかかえて上下するものの、大きな彫刻には滑車を使用して吹抜きの空間を吊って運ぶ、頗る奇妙危険な方式が採られた。この実情を知っていた薬師寺の橋本凝胤師はこれが改善を要望した。まことに由々しい話で、社寺その他の蔵品寄託の上に奈良博の運営が成立っているのに、このような保管方法が、万一広く列品寄託者の知るところとなれば、寄託者は安心して所蔵品を奈良博に預けられなくなり、同館の存在理由にもヒビを生じる危険があった。これを救う道は近代的収蔵庫を新設する以外にない。かくして奈良博の収蔵庫新設が決まった。陳列館の南に接する収蔵庫は勿論鉄筋コンクリート造りであるが、コンクリートの内壁に空間を作って板を張り、この空間を利用して、庫内の自然換気を計ることにした。同庫の着工、竣工は私が同館を去った後、昭和十二年秋であった。爾来同収蔵庫の状態は、温度、湿度ともに良好の由を聞いている。

太平洋戦争を挿んで十年の歳月が流れた。そして昭和二十二年五月三日、正倉院は四十年間の紐帯が解かれ、皇室博物館を離れ、図書寮<sup>7</sup>の主管に移り、直接には正倉院事務所が事に当たった。

(7) 昭和二十四年六月、図書寮と諸陵寮が合併して書陵部となる。

昭和二十四年一月法隆寺金堂が焼けた。之をきっかけに二十三年末成

立したばかりの日本学術会議は、正倉院の保存と活用に関して宮内庁へ勧告するところがあった。<sup>(8)</sup>

(8) 学術会議会員藤田亮策氏がこの勧告の成立に尽力し、私も臨時委員の形で、同会議の特別委員会に出席した。

その頃、奈良県営春日奥山周遊道路から分岐して若草山の裏を廻って、正倉院東北知足院谷を下り、正倉院敷地東北角に出で、正倉院防火線<sup>(9)</sup>を利用し、同院敷地の北側と西側を、宛も正倉院を包むようにして、同敷地の西南角に抜ける自動車道開通工事が進んでいた。

(9) 一九二二(大正一一)年四月、宝庫と大仏殿の中間に在った東大寺塔頭勸学院が焼亡した。その跡は正倉院敷地に編入されるとともに、「二ツ池」<sup>(10)</sup>と云う大仏池を改修して大池<sup>(11)</sup>を作った。正倉院敷地の東・北・西を繞る幅広い道路が開かれて防火線となった。



宝庫

正倉院では同道路を通る自動車による塵埃や排気ガスが、生駒山脈を越えて奈良に達する大阪や更に遠く尼崎辺の煙と共に、宝物保全上極めて好ましくないと考え、大阪管区気象台、奈良地方気象台、神戸大学に依頼して、宝庫内外の大気を調査し、汚染された大気の宝庫内浸透が明らかとなった。こ

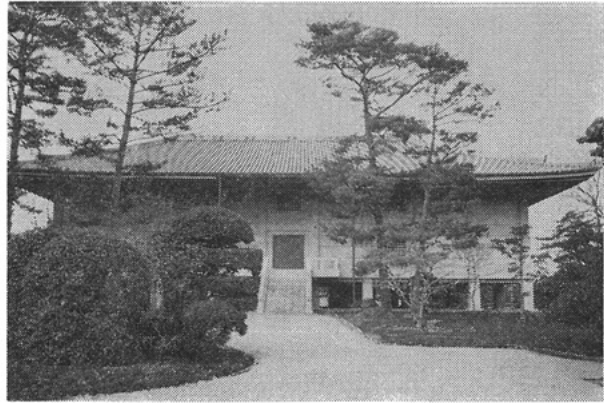
れに由り、この害に対して自衛手段を講じる必要を認め、まず仮宝庫に代わるべき庫倉を建てることになった。ここにいう仮宝庫とは、一九一三(大正二)年校倉宝庫の解体修理に際して、宝庫収納の宝物を全部一時仮納した板庫であったが、宝庫修理が完了して、宝物を之に還納した後、いわゆる宝物中「塵芥」整理——主として繊維製品整理——の結果、量的にも、形態的にも宝庫に収納不能となったものを、数十合の未整理宝物収納櫃と共に上記板庫に納めた。爾来約四十年、未整理宝物の整理が進むに随い、同庫納在宝物は莫大な量に達するに至った。かくして、仮庫又は仮宝庫と呼ばれた庫蔵に代わる不燃性の倉が昭和二十六年着工、同二十八年に竣工した。但しこの庫蔵も奈良博の収蔵庫とはほぼ同様な方式に成るものであって、自然換気に関する工夫が一步進んだものの、なお本庫<sup>(12)</sup>校倉<sup>(13)</sup>に代わる庫蔵に対してなお試験段階を脱するものではなかった。

(10) 昭和三十九年に至り空気調節設備に改善された。

これより更に数年、本宝庫に代わる庫蔵の建設が計画されたが、これには耐震・耐火・防雷は元より、機械による宝物保存のための温度・湿度の調節及び塵埃・有毒ガス等の濾過設備が要請せられ、これらの諸条件を備えた庫(西宝庫)<sup>(14)</sup>が昭和三十七年竣成したのである。

東宝庫





西 宝 庫

(11) 同庫蔵が竣工するに及んで、同庫を西宝庫と呼称することとなり、之に対して仮宝庫に代わる庫を東宝庫と呼び、古来の校倉宝庫を正倉と称した。

正倉院宝物保存に関する人工諸設備はここに一段落した。しかしこれを以って宝物保存は万全にして、能事了るというものではない。あるいは新建の諸宝庫は高温低湿で乾き過ぎるのではないかとする地元科学者の批判が提起された。之に対し他の科学者の反論もある。元より著しい高温、著しい低湿<sup>○乾</sup>が木工品や漆工品<sup>○木質の胎</sup>にヒビ割れを誘うことは有り得るけれども摂氏三〇度以下の常温に近く、湿度六〇、七〇パーセントを保つ東西両宝庫においてはその心配はないが、大気中の有毒ガスは今なお新造宝庫に微かながら侵入するを免れぬという。また思わぬところに伏兵があるので、製薬会社のカプセル製剤室に用いられる、活性炭を主とする大気濾過装置と同様な装置を潜った空気中の埃は、更に静電気室で吸着除去されているが、この静電気室に発するオゾンが庫内の宝物

を酸化させる——たとえば鉄製品を錆させる惧れがないでもないという。蓋し最善はあっても万全は有り得ない。一つの善を狙って、一つの失を生じることが避け難いのである。一善を為さんとして、生れる一失は、また之を制圧することを工夫する、このような各個撃破が保存事業の道であらう。

(元正倉院事務所長)